

民俗建築アーカイブ<sup>30</sup> Minzoku Kenchiku Archives <sup>30</sup>

## 1940年の沖縄

—命ドウ宝—

古川 修文

## Okinawa in 1940: Life is Precious

Archive Committee Nobuhisa FURUKAWA

佐藤重夫は昭和9年に東京帝国大学を卒業したあと、渡辺仁建築工務所で6年間施工を学んだ。渡辺所長は佐藤の実力を認めて、かつて渡辺が務めていた通信省に転職を進めた。当時の通信省には東京中央郵便局(昭和8年)を設計した吉田鉄郎や東京通信病院(昭和13年)を設計した山田守など、いわゆる通信建築を代表する著名な設計者がいて佐藤から見ても魅力ある職場であった。佐藤はそれを夢見て昭和15年1月8日通信省に就職したが、配属されたのは通信省航空局技術部建設課の技師であった。当時、航空局は通信省管轄であり、しかも戦争への道を突き進んでいるときで、若い佐藤は軍の施設拡充に期待されたのである。早速与えられた最初の仕事は新潟や岡山、福山に航空機乗員養成所を建てることであった。更にそれと並行して名古屋飛行場合同庁舎や那覇方向探知局庁舎(沖縄県)の計画も兼務で進めていた。軍に関係した施設の設計や工事はすべてが機密事項であり、工事関係の記録写真はすべて監督部署に提出しなければならない。そんな中で唯一佐藤のカメラで撮影し、現像やプリントも佐藤がやったと思われる沖縄民家の写真が24枚残されていた。写真の撮影期間は昭和15年7月24日~28日の5日間であり、那覇、糸満など沖縄本島南部を撮ったものである。家屋、街並み、働く人物などの写真で「沖縄紀行」のメモがあった。モノクロのフィルム1本分であろうか。写真の大きさはA4判に近いものである(短辺がA4より25mm大きい)。

ここで不思議に思うのは、昭和15年7月下旬は航空機乗員養成所の設計施工で多忙を極めているときであり、沖縄紀行などとのん気なことをいつている場合ではない。しかも沖縄に行くには九州から日数をかけて船で行くのが普通の頃、そんなときに無理して沖縄に行ったのは方向探知局の設置計画のためと想像がつく。

昭和に入って海軍は飛行機による戦略が重要視され、昭和8年(1933)に那覇に小禄飛行場が建設されていた。これは通信省航空局が内地(九州)~台湾間に民間定期便を就航させるために、その中継地として昭和11年(1936)に通信省管轄の那覇飛行場となっていた。このおかげで通信省航空局技術部が方向探知局の建設計画で那覇に行くのに飛行機を優先して使うことができたのに違いない。佐藤ら航空局の技師は定員10人前後の飛行機に乗って福岡から那覇へ来たのであろう。主要任務である方向探知局とはレーダー基地であり、その建設地を決めることは重要課題である。山の上で四方が見渡せ、かつ、防備が必要で、資材運搬の道路も必要である。多くの条件を満たす場所を決めるには佐藤の知識が必要であった。軍に絡む仕事は一切機密であるから何人であったのか、どこに泊ったのか、どんな仕事をしたのか、一切不明である。ただ、佐藤が残した写真から調査した場所が分かり、それにより糸満で13枚、安里で8枚、小禄で3枚の写真であることを知った。糸満は那覇の南、安里は那覇の首里城の近く、小禄は那

覇空港の近くである。沖縄滞在の5日間、南方に向けての方向探知局を想定して調査したと思われるが、那覇の小高い丘にある首里城からは四方の空が開け、海も見える。方向探知局は首里城の一隅が最適地と考えたのではなかろうか。那覇より北の地域を調査していないのを見ても、北方の山岳地からの侵攻は考えられないと見たのであろう。通信省航空局の職員が私服で視察して歩いても目立つことなく、佐藤もこれが戦争の準備に結びつくという意識は薄かった。むしろ初めて訪れた沖縄の民俗習慣に興味を引かれ、那覇を中心に近郊を歩いて佐藤のカメラで民家、集落の風景や人々の生活、生業などの取材を行った。

初めて見た沖縄は、空も海も山も本州にはない不思議な霊力が感じられ、人々は素朴で働き者であるが、のんびりとした性格で、人なつこい。風俗習慣も洗練された文化の上に成り立ち、こちらの質問や写真撮影にも気軽に応じてくれた。夜は星空が綺麗で、明け放された部屋に涼しい風に乗って、どこからか沖縄の歌も聞こえてくる。佐藤は貴重な体験と忘れられない思い出を得て東京へ戻り、再び多忙の任務に就いた。航空局管理の写真は担当部署でプリントするが、佐藤個人の写真は現像、焼付けをする暇がなく、仕事の合間を見て徹夜でプリントした。その時は今のL判(12.7×8.9cm)の大ききでプリントし、B5判の台紙に貼って保存した。

佐藤は終戦を迎えた昭和20年の12月まで通信省に勤めたが、その間、軍に関係した施設ばかりを担当した。戦争という緊迫した時代に生きたものは誰もが愛国青年となり、国家のために尽くすのが当たり前前と思ったが、佐藤も何の疑問も持たず任務に励んだ。ただ、佐藤は戦地で直接戦闘にかかわる施設を経験しなかっただけに、戦争の悲惨さは知らないままで過ごした。しかし、戦況が悪化し始めてから各地の空襲被害が激しくなり、郷里の岡山も焼け野原となった。昭和20年6月、佐藤は沖縄が壊滅状態に

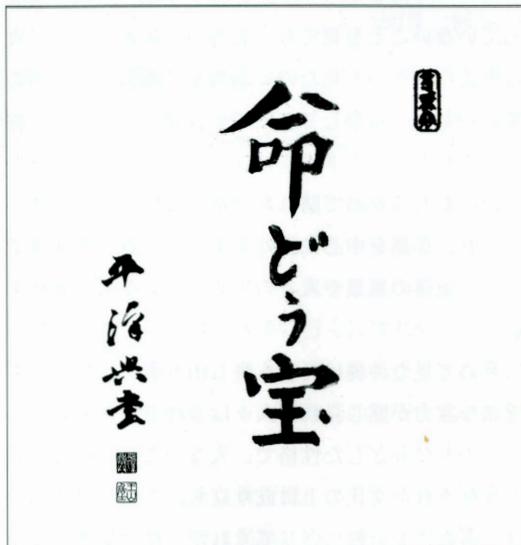
なったことを知り、衝撃を受けた。少しずつ入ってくる情報では沖縄は全土にわたって全滅し、多くの人が死に、生きていても悲惨な状況であることを知った。あらためて沖縄で撮った写真を古い箱の中から探し出して見つめた。いろいろなことが思い出されてくる。あるとき昼食に入った小さな食堂の壁に「命どう宝」と墨書された古い掛け軸がかかっていた。その店主は「inuchi du takara」と読み、昔、琉球の王が人々に語った言葉で、人の命は何よりも尊いという意味だと教えてくれたのを思い出した。沖縄の人々の誰もが持つ教訓だったのである。あとき佐藤はこの言葉がごく当たり前のことくらいに感じていたが、今、電撃を受けたような思いに打たれた。沖縄戦の5月、6月、日本の指導者は毎日のように“国のために命を捨てよ”と若者を叱咤し、知覧から“命どう宝”の島を囲む敵艦に体当たりせよと飛び立たせたのではなかったか。特攻隊という愚劣な作戦で国の宝を殺してしまった。沖縄と日本本土の指導者に見る違いは何であろうか。文化の違いであろうか。その違いを思うと、沖縄の人々の崇高な命が惜しまれてならない。勿論、特攻隊で死んだ若者にも悔やみきれない思いがする。佐藤は改めて沖縄の写真を見直した。美しく豊かな自然の中で与えられた命、人生を享受する心豊かな人々の姿が写し出されていた。この沖縄の人たちも特攻隊の青年も、沖縄守備隊の日本兵も、多くの島民も、そして米軍の兵士たちも死んでいった。佐藤はいたたまれない悲しみと怒りを感じた。あとき、方向探知局のもつ意味の深さも考えず、与えられた任務に忠実に従って捜し歩き、余暇には興味に任せて人々の生活を写真に撮っていた。戦争にかかわっている自分に気づかない浅はかさに自責の念を感じた。この写真は戦場となって全滅した人々の生前の姿である。5年前まで平和な沖縄で暮らしていた人たちの遺影なのだと気が付いた。佐藤重夫の戦後80年はこのときから始まったといえる。佐藤は写真のネガ

を取り出して、1枚1枚A4判サイズの印画紙に引き伸ばし、アルバムを購入して貼り付けた。当時、手帳に簡単に書き残していたメモを整理してアルバムに添えた。沖縄で得た貴重な経験の記録であった

が、それ以上に沖縄の人々への鎮魂の碑のような思いでアルバムを作った。後日、佐藤はこのアルバムを「沖縄祈興」に変えた。



沖縄南部の糸満や具志頭村は最後の激戦地となり、首里城地下壕にあった第32軍司令部はここまで追い詰められて終焉の地となった。家も畑も全滅した。(写真：伊是名氏提供)



“命どう宝”は「イヌチドウタカラ」と読み、「nuchi du takara」と発音する。

沖縄県民の誰もが持つ大切な言葉である。言葉の謂れは明治12年琉球最後の国王・尚泰(しょうたい)が沖縄を離れるときに島民に残した言葉といわれているが、他の説もあり定かではないようである。しかし「命どう宝」は戦前戦後・今日を通して沖縄県人の魂として大切に抱かれている。(著者所有の色紙を写す)

本稿に掲載した写真をご希望の方は下記に申し込みください。

アーカイブ委員会

古川修文：syu-bunkan@jcom.zaq.ne.jp



1 くり舟(丸太をくり抜いた丸木舟、糸満)



2 農家(石垣はサンゴの野面積み、糸満)



3 農家(屋敷囲いはフク木と石垣、糸満)



4 路傍(軒に電柱、屋根にシーサー、安里)



5 屋根(寄棟が多く切妻は少ない、那覇)



6 猫(猫ものんびり路上で昼寝、安里)



7 屋根(重厚な赤瓦の本瓦葺き、那覇)



8 墓(珊瑚石で作った家形の墓、糸満)



9 機織(一家に一台機織り機がある、糸満)



10 山路(石灰岩は野堀で採集、小禄)



11 魚市場(高齢女性に見るハジチ、糸満)



12 魚市場(買い手の注文でさばく、糸満)



13 港の婦人(頭上のにせて運ぶ女性、糸満)



14 魚市場(珍しい魚が並ぶ、糸満)



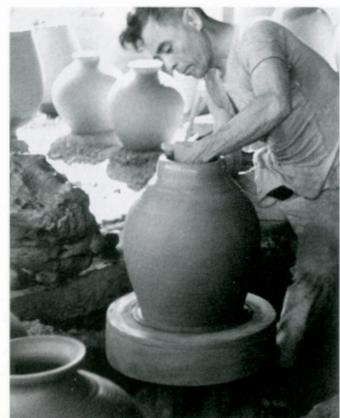
15 魚市場(魚は芭蕉に包んでくれる、糸満)



16 壺屋(ひも状の粘土を重ねていく、安里)



17 壺屋の庭(主屋の軒下は乾燥場、安里)



18 壺屋(泡盛の醸造に使われる、安里)



19 瓦屋(女瓦は円錐台形を4等分する、安里)



20 壺(壺は天日干しのため庭に並べる、安里)



21 くり舟(日射は強いが風は爽やか、糸満)



22 瓦屋(庭先の瓦の干場、安里)



23 裏路(軒下は暗く涼しい、糸満)



24 港(岸壁は舟を引き上げる所、糸満)

## 那覇写真の説明(佐藤重夫)

1. くり舟(糸満) 前の二つの船がくり船で南洋の方のものに似ていますが、現在のは二枚の木で出来ています。家の周囲の石垣は風雨の防御のためです。
2. 農家(糸満) 藁葺きの農家で家の周囲はやはり石垣です。青く繁った木は「ふくの木」と云います。
3. 農家(糸満) 2.と同じ。
4. 路傍(安里) 長屋です。屋根の獅子は民芸の香りのある何かまじない物です。陶器は「しっくい」でかためたものです。色の塗ってあるものもあります。
5. 屋根(那覇) 屋根の様子です。すっかり漆喰でぬりつぶしてあります。
6. 猫(安里) 近よったので猫がいまにもにげそうになりました。
7. 屋根(那覇) 屋根の谷の様子がよくわかります。
8. 墓(糸満) お墓です。これがこの地方で最もお金のかかったものです。周囲は石(大理石)で珊瑚礁の石を切った白い石です。屋根は漆喰ぬりです。内部は大きな十帖程の室で最後に前の小さな口から出てすっかり塗りつぶすのです。土葬にしております。凡そ住家はいたって粗末ですがお墓が立派でそれぞれ全財産を以て後々の生活のために作るのだそうです。これは二万円の墓だそうです。他のものはこれがもう少し粗末になった程度です。
9. 機織り(糸満) さつま上布の織られている処。
10. 山路(小禄) 妙なくわをつかっています。
11. 魚市場(糸満) 魚市場の老人です。昔は既婚の女性はいれづみをしたそうで、手や足によく見えます。
12. 魚市場(糸満) 魚市場の様子です。ずいぶんしらない大きな魚やかめ(海がめ)があります。勿論生きて居ります。手前の買う人は「ばせう布」を着ています。帯でなくひもでむすんで涼しそうです。
13. 港の婦人(糸満) 頭に何でものせています。魚や野菜などは女性が大部分です。
14. 魚市場(糸満) 12.と同じ。
15. 魚市場(糸満) 魚市場の一隅で、向こうの方に半分ほど海亀のしりが見えています。手前のは貝です。
16. 壺屋(安里) 泡盛の壺を作っている処です。足で回すろくろです。
17. 壺屋の庭(安里) 壺やの裏庭です。
18. 壺屋(安里) 16.と同じ。
19. 瓦屋(安里) 瓦屋です。手で廻しているのが平瓦(女瓦)になるのです。朝鮮式の作り方で左手に持っているのが図1の(イ)に当たります。
20. 壺(安里) 壺を干している処。
21. くり舟(糸満) 海でくり舟が見えます(手前の子供の処)。いかにも暑そうです。
22. 瓦屋(安里) 19.の瓦を干している処。主婦がこれからかついで窯に入れようとして運んでいる処です。
23. 裏路(糸満) 黒く焼けすぎています。
24. 港(糸満) 海岸です。

図1 瓦の作り方

「ネンド」(ハ)を(ニ)の弓を以て上面をこすると(ホ)の如き土の板が作られるので、これを「ろくろ」

(ヘ)の上のにせた(ロ)のまわりに巻き、廻し手でおさえて写真の様な形にします。

出来たら(イ)をほそくして上方にぬき、次に(ロ)をぬきとって(ト)の如き形につくり、日干しとし次にかまに入れて焼き、出来たものを(ヘ)の如くねって平瓦とします。

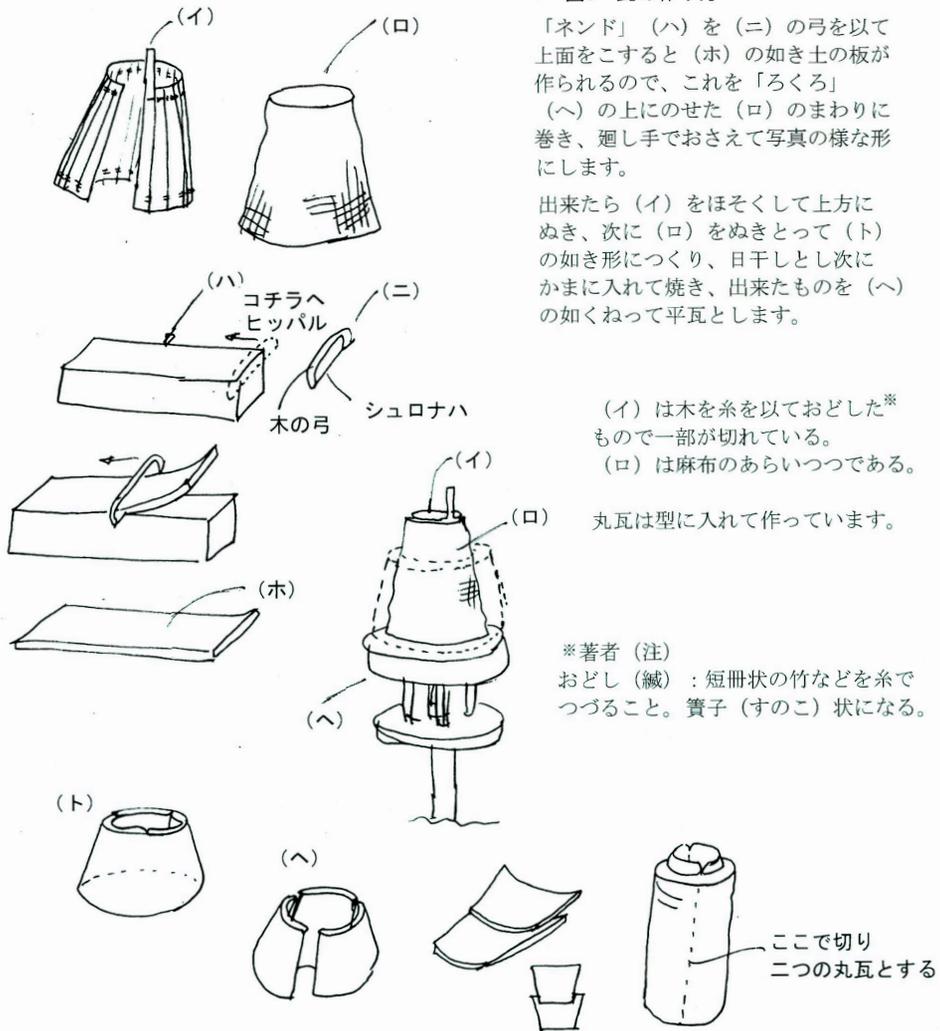
(イ)は木を糸を以ておどした<sup>※</sup>もので一部が切れている。

(ロ)は麻布のあらいつつである。

丸瓦は型に入れて作っています。

※著者(注)

おどし(緘)：短冊状の竹などを糸でつづること。簀子(すのこ)状になる。



絵と説明：佐藤重夫